



東京証券取引所  
ロンドン駐在員事務所  
**アンナ・ヒル**

—連載（第8回）—

## ユンケル委員長の率いる欧州委員会(The Juncker Commission)

### ■ 1. はじめに

昨年11月1日、ジャンクロード・ユンケル前ルクセンブルク首相（59歳）が、欧州委員会委員長（President of the European Commission）に就任した。

欧州委員会委員長は、欧州理事会（European Council）の指名、欧州議会（European Parliament）の承認を経て選出される。ユンケル新委員長は、6月27日の欧州理事会で指名され、7月15日の欧州議会で承認されて選出された。ユンケル氏の選出を巡り、英国は反対の立場をとったことからEUにおいて孤立を深めたという見方がある。欧州委員会ユンケル体制は今後、どのように展開していくのか、英国との関係を中心に考察したい。

### ■ 2. 英国の立場

ユンケル氏は、1984年ルクセンブルク代議院議員に当選後、様々な形式で欧州共同体にかかる仕事に関わり、ヨーロッパ連邦主義（Pro-Europeanism）の考えを持つようになったと言われている。1993年に発行された欧州連合の創設を定めたマーストリヒト条約の立案者と言われ、自他ともに認めるEUの立役者的な存在である。

英国は、EU加盟国であるが、ユーロを使用していないほか、金融政策、移民政策様々な政策において考え方を異にしている。ユンケル氏が委員長となれば一層連邦主義の政策を打ち出されると予想されたことから、英国政府、特にキャメロン英首相は同氏の選出に強く反対したのであった<sup>(注1)</sup>。もう一つ、反対する理由としては、反EU勢力が英国国内で急速に台頭して来たことへの対応である。キャメロン首相は、一昨年1月、「2015

~~~~~

年の総選挙で自身の保守党が勝利すれば、2017年までのどこかでEUからの離脱の是非を問う国民投票を実施する」ことを約束し、国内の反EU世論に一定の配慮を見せてきたが、現在、反EU政党である英国独立党（UK Independence Party：UKIP）が急速に支持を集めだしていることから、キャメロン首相も、反EU色を強めることで、UKIPの主張を目立たなくさせたい狙いがあった。

英国は、欧州理事会の最終局面までユンケル反対を唱え、はじめて委員長の選出が加盟国の総意（コンセンサス）ではなく、加盟各国（28カ国）首脳による票決によって決められることとなった。結果は、賛成26票、反対2票。反対したのは英国とハンガリーであった（注2）。

英国は最後まで自国の立場を明確にしたということで評価する見方もあったが、結果として、欧州理事会では大惨敗を喫したということで、キャメロン首相を非難する声が大きく上がった。

### ■ 3. ユンケル委員長の基本的な考え方

ユンケル氏は、委員長に選出された後、自説をウェブサイトで公表した。主なものは以下のとおり。

・デジタル単一市場：テレコム市場を単一市場にし、著作権法や競争法を一つにすること。この分野において統合を更に深化させ

ていく考え。

- ・通貨ユーロの改善：将来の改善計画を社会的な影響を踏まえて考えていくこと。
  - ・米国との自由貿易協定：交渉を開始し、関税廃止を目指していくこと。
  - ・EUの民主制：欧州議会との協力を大切にすること。各加盟国の主権を守りながら、連合として前進していくこと（注3）。
- ⇒ 更に注目される点は、委員会の組織体制を改正したことである。改正前は、委員長の下に委員27名がそれぞれの分野を担当するフラットな仕組みであったが、改正後は、委員長の下に7名の副委員長（Vice President）を設け、その副委員長の下で20名の委員は担当分野を担当する仕組みとした（注4）。

### ■ 4. ユンケル委員会の主要委員

ユンケル氏自身は中道右派であるが、昨年11月に就任した委員会の委員は左派が多く、共産主義活動の歴史を持つ委員も含まれているが、新委員は全員ユンケル氏の基本的な考え方を支持していると言われている。

ユンケル氏は各委員にミッション・レター（Mission Letter）を用意し、それをウェブサイトで公表した。このレターには、各委員に求めるミッション・目標が記載された。

ここからは、金融市場に影響を与えそうな委員とそのミッションを紹介したい。

1人目は経済・財務・税制・関税担当を務

めるフランスの元財務大臣ピエール・モスコビシ氏。モスコビシ氏は議会議員のインタビューで、右派の議員に厳しく批判され、フランスで失敗した政策がEUで成功するはずはないとの声が上がったが、僅差で議会の賛成を取り付けた<sup>(注5)</sup>。モスコビシ氏のこれからの目標は、経済・通貨連合をさらに深化させていくことや、金融取引税（FTT）を最終化すること等である<sup>(注6)</sup>。

2人目は域内市場・産業・起業・中小企業を担当するポーランドの副首相エルジビエタ・ビエンコフスカ氏。ビエンコフスカ氏はインタビューで、中小企業の支援と単一市場の拡大を第一のミッションとして挙げた<sup>(注7)</sup>。ユンケル氏のレターを見ると、求めているのは中小企業の支援と、域内市場の完成である<sup>(注8)</sup>。

3人目は競争を担当するデンマークの副首相マルグレーテ・ベステアー氏。ベステアー氏はインタビューで、企業より消費者のニーズを考えるべきだと述べた。ユンケル氏からのミッションは、競争の管理を経済的に考えることと、競争規制を効果的に管理していくことである<sup>(注9)</sup>。

そして最後4人目は、金融安定・金融サービス・資本市場同盟を担当する英国のジョナサン・ヒル卿である。保守党のヒル卿は英国の貴族院のリーダーを務めたが、英国ではその名前はあまり知られていなかった。キャメロン首相は、今年の総選挙よりも前に国会議員を失うのを避けたいがため<sup>(注10)</sup>、ヒル卿

がPRの経験を有し、EUとの交渉に向いている等の理由でヒル卿を委員に選出した<sup>(注11)</sup>。キャメロン首相は、ヒル卿がEUで英国の利益を主張する役割も期待した<sup>(注12)</sup>。

ユンケル氏が英国の候補者を金融資本市場の担当に選んだのは、ここ数年英国はEUが進めてきた銀行・金融改革に抵抗してきた経緯があり、英国にその改革を行うポストを割り当てること、キャメロン首相のこれからの態度を軟化させる意味があったと考えられる<sup>(注13)</sup>。

このヒル卿は、昨年7月の金融安定等を担当する委員候補になって以来、他のEU加盟国から、PR会社との利益相反や、ユーロ圏に入る気配がない国から選出された委員が果たしてユーロ支援をできるのかといった疑いが持たれ、EU議会の議員から厳しい尋問を2回も受けるなど、激しい風当たりを受けての委員選出となった。

ヒル卿に与えられたミッションは、まさに、銀行・金融改革を、現在の計画どおりに進めていくことで、その手腕が試されている。

## ■ 5. ユンケル体制の今後

ユンケル体制の今後を考える上で、昨年5月の欧州議会選挙に注目したい。この選挙は、リスボン条約が発効（2009年12月）し、欧州議会の権限が拡大されて以来初めての選挙で、「This time it's different（今回は違う）」というスローガンを広く用いて投票を呼びか



けたが、投票率は前回（2009年6月）と同程度の43.09%と低水準に留まり、EU内の人々のEUへの関心があまり高まっていないことが示された。また、投票結果は、EU統合を推進する欧州人民党と社会民主進歩同盟の二大政党グループが70%を占め大勢に変わりはないが、反EU政党が台頭した特徴があった。

ユンケル氏は、「This time it's different」というスローガンを信念にもち、EU統合推進派の影響を受けて、今後、活動を展開していくものと考えられる。マーケット関連の政策としては、既に定まっている欧州金融商品市場指令改正案（MiFID II）等を確実に実行し、EU各国に横断的に適用される規制を打ち出してくるのではないだろうか。既に中小企業を支援し、大企業に制約を課す考えも示している。

英国のキャメロン首相はこれまで、現在のEUのあり方を見直す改革を唱えてきたが、委員長を選出にかかる“戦争”に敗れ、英国の影響力は薄れていく可能性がある。特にEU内では、UKIPの台頭と保守党の反EU化で、英国に対する不信感を強めている。ヒル卿は個人的な考えとしてEU統合を支持しており、英国のEU内でのプレゼンス維持のためには重要な役割を果たすであろう。

前述のとおり、英国は本年5月に総選挙があり、キャメロン首相率いる保守党が勝てば反EUの姿勢は継続され、2017年までにEU継続・脱退を問う国民投票に至り、脱退の結論が出されることも否定できない。逆に労働党

が勝てば、EUとの関係は一気に好転する可能性は高いが、労働党の支持も、エド・ミリバンド党首のリーダーシップの欠如から全く伸びていない。今年の総選挙の影響は、英国だけのものでなくEU全体に波及することは必至である。

EU内は、金融危機は乗り越えた感はあるが、苦しい経済情勢の加盟国を多く抱え、問題は山積している。反EU化する英国とどのように付き合うか、更に最近のギリシャの件も、ユンケル委員長にも頭が痛い問題と言えそう。ユンケル体制は、難題を解決すべく本格的な取り組みはこれからである。しかし、ユンケル氏自身、就任直後にして、ルクセンブルグの首相と財務大臣時代の大手企業を対象にした課税軽減措置に焦点が当てられ、欧州議会で不信任投票が仕掛けられるなど、厳しい船出となってしまった<sup>(注14)</sup>。投票自体は切り抜けたが、就任1ヶ月で委員長としての評判が低下してしまったことはユンケル氏自身が認めるはめになった<sup>(注15)</sup>。さらに、ユンケル氏が主導して11月末に3,150億ユーロを使う景気対策を発表したが、EU議会の承認はされたものの、その内容に、3,150億ユーロの93%を民間の投資家から調達するということが含まれ、その実現可能性に評論家からは厳しい意見が出されている<sup>(注16)</sup>。このように、既につまずいてしまったと言えるユンケル氏がどのように挽回し、EU内でどのようにリーダーシップを発揮していくのか、その一挙手一投足が注目される。



【参考】

欧州委員会とは

EUの中では、4つの機関が以下の通りに別々の役割を務める。

- 欧州理事会 (European Council) は加盟国の国家元首によって構成され、年に4回EU全体の方向性を決めるために集まるが、具体的な政策作りは行わない。
- 欧州委員会 (European Commission) はEU各加盟国から1人ずつの委員に構成し、政策と予算案を議会に提出する。
- 欧州議会 (European Parliament) は議員が5年に1回直接投票で選ばれ、理事会と共同で委員会の提案を議論し、立法する。
- 欧州連合理事会 (Council of the EU) は各加盟国の大臣によって構成され、議会と共同で政策を立法する。

委員会は、政策の提案以上に、議会に立法した法を執行し、EU外の国との交渉も行うので、EUでもっとも権力を握っている機関といわれる※。

新委員会の選考は5年に1回、以下の通りを行う。委員会委員長の選出では、議会は理事会が提示した候補者の承認で投票するが、2009年から、理事会の選択には「欧州総選挙の結果を考慮に入れる」というルールも適用されている。

7月 委員会委員長は議会投票で選出

7月-8月 委員候補者は加盟国から1人ずつ提案され、委員長に選ばれる

9月 委員長は候補者それぞれの担当を決定

9月-10月 議会議員は候補者各人とインタビューを行い、適任か判断する (判断は拘束力がない)

10月 委員長が決定した委員会は議会投票で承認を受ける

11月 新委員会が就任する

※<http://www.bbc.co.uk/news/world-europe-29139503>

(注1) <http://www.bbc.co.uk/news/world-europe-27679170>

(注2) <http://www.theguardian.com/world/2014/jun/27/juncker-wrong-person-european-commission-leadership-david-cameron>

(注3) [http://ec.europa.eu/about/juncker-commission/priorities/index\\_en.htm](http://ec.europa.eu/about/juncker-commission/priorities/index_en.htm)

(注4) [http://europa.eu/rapid/press-release\\_IP-14-984\\_en.htm](http://europa.eu/rapid/press-release_IP-14-984_en.htm)

(注5) <http://www.irishtimes.com/news/politics/gasps-of-astonishment-as-france-s-pierre-moscovici-struggles-to-convince-lawmakers-1.1949302>

(注6) [http://ec.europa.eu/about/juncker-commission/docs/moscovici\\_en.pdf](http://ec.europa.eu/about/juncker-commission/docs/moscovici_en.pdf)

(注7) <http://ephearings2014.eu/post/98979736411/elzbieta-bienkowska-internal-market-industry>

(注8) [http://ec.europa.eu/about/juncker-commission/docs/bienkowska\\_en.pdf](http://ec.europa.eu/about/juncker-commission/docs/bienkowska_en.pdf)

(注9) [http://ec.europa.eu/about/juncker-commission/docs/vestager\\_en.pdf](http://ec.europa.eu/about/juncker-commission/docs/vestager_en.pdf)

(注10) <http://www.theguardian.com/politics/2014/jul/15/lord-hill-cameron-uk-european-commissioner>

(注11) <http://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-28310707>

(注12) <http://www.bbc.co.uk/news/world-europe-29518722>

(注13) <http://www.ibtimes.co.uk/david-cameron-boosted-by-lord-hills-appointment-european-commission-1464874>

(注14) <http://www.bbc.co.uk/news/world-europe-30235005>

(注15) <http://www.theguardian.com/world/2014/dec/12/jean-claude-juncker-luxembourg-admits-sweetheart-tax-deals-sullied-reputation-eu-head>

(注16) <http://www.telegraph.co.uk/finance/economics/11253267/Jean-Claude-Junckers-315bn-New-Deal-dismissed-as-a-subprime-gimmick.html>

